

フランス軍がアフリカから次々撤退

タマラ・リジエンコワ

インターナショナルリスト 360 2025年2月28日

<https://libya360.wordpress.com/2025/02/28/adieu-africas-military-breakup-with-france-is-official/>

アフリカの指導者たちがフランス軍基地の閉鎖を相次ぎ発表。アフリカ大陸がフランスの政策を拒否しているという明確な兆候が表れている。

フランスは、サヘル地域と西アフリカ諸国での軍事的プレゼンスを完全に失おうとしている。セネガル、チャド、コートジボワールが2024年後半にフランスとの軍事契約を終了する意向を表明したからだ。

これより先、フランス軍はマリ、ブルキナファソ、ニジェールからも撤退した。軍事クーデター後に成立したこれらの諸国の暫定政府は、もはやかつての植民地支配者との協力を望まず、AES(サヘル諸国同盟)として知られる新しい連邦の下で団結することを目指している。これらの国々は、この地域におけるフランスの影響力維持の道具と見なされている西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)からの離脱も選択した。



設立したサヘル諸国同盟 (AES) 連合の第 1 回サミットに参加したている○マリの暫定大統領アッシミ・ゴイタ大佐、ニジェールの暫定大統領アブドゥラハマネ・ティアニ准将、ブルキナファソの暫定大統領イブラヒム・トラオレ大尉@ CapitaineIb226。

チャド

チャド政府は 2024 年 11 月 28 日、5 年前の 2019 年 9 月 5 日に署名したフランスとの防衛協定を終了すると発表した。

「チャド共和国政府は、フランス共和国との防衛協力協定の終了決定について、国内外の世論に通知している」とチャド外務省の声明は述べている。フランス軍のチャド撤退期限は 1 月 31 日に設定された。2024 年現在、1978 年に締結、2019 年に改正された協定に基づき、約 1,100 人のフランス軍がチャドに駐留していた。

2025 年 1 月 30 日、チャドの参謀本部は、フランス最後の軍事基地である首都ンジャメナのアジ・コッセイ軍事基地の支配権が正式にチャド軍に引き渡さ

れたと発表した。北部のファヤと東部のアベチェにある他の2つの基地の支配権は、それぞれ12月26日と1月12日に引き渡された。

チャドは、アメリカからの軍事支援も拒否している。2024年4月、チャド政府は米国に書簡を送り、米軍の駐留を認めた地位協定(SOFA)の終了意向を発表した。書簡は、全てのアメリカ軍兵士が首都ンジャメナの軍事基地から撤退するとしていた。ペンタゴンは、この動きを「一時的なもの」としていたが、4月25日までに、75人の兵士を撤退させることを確認した。

この状況は、米国内で、サヘル地域での影響力を中国やロシアなどの国々に奪われるのではないかという懸念を引き起こした。これらの懸念は、1月にクレムリンで行われたチャドのマハマト・イドリス・デビ・イトノ大統領とロシアのウラジーミル・プーチン大統領との会談によってさらに悪化した。両者の会談は、チャドが何十年にもわたった親欧米政策から離れ、マリ、ニジェール、ブルキナファソの例に倣って、東に目を向けるという意図を示したからだ。



ロシアのウラジーミル・プーチン大統領(右)とチャド・マハマトのイドリス・デビ暫定大統領(左)は、ロシアのモスクワのクレムリンでの会議に出席して握手を交わした。○ スプートニク/ミハイル・メツツェル

セネガル

2024年11月29日、チャド外務省の声明の翌日、セネガルのバシロウ・ディオマイエ・フェイ大統領はAFPに対し、フランスはセネガルの軍事基地を閉鎖しなければならないと次のように語った。

「フランス軍基地の存在は、セネガルの主権と両立しない。セネガルは独立国であり、主権国家であり、軍事基地の存在は主権国家ではない」。

フェイ大統領は2024年4月に大統領に就任し、国の主権を支持し、外国の影響から自由になることを誓ったが、フランス軍を追い出したからと言って、両国の関係断絶を意味するものではないと強調した。

大統領はまた、フランスのマクロン大統領から書簡を受け取ったことを明らかにし、マクロン大統領は其中で、フランス植民地軍が1944年12月1日に首都ダカール近郊で犯したティアロエの虐殺に対する責任を明確に認めたと述べた。その日、フランス植民地軍の一部として第二次世界大戦で戦ったティライユールと呼ばれる最大400人のセネガル人兵士が、賃金未払いに起因する反乱を口実に、自国の指揮官によって射殺された。フェイ大統領は、マクロン大統領の認識を歓迎し、「大きな前進」と見なした。

フェイ大統領はまた、セネガルが中国、トルコ、米国、サウジアラビアなど、セネガルに軍事基地を持たないいくつかの国と強い関係を維持していると指摘した。

2024年12月27日、セネガルのウスマン・ソンコ首相は、国内のすべての外国軍事基地の閉鎖を発表した。首相は特にフランスを名指ししなかったが、セネガルに駐留している外国軍はフランス軍のみで、フランスは2025年中にすべての基地を引き渡すと予想されている。

現在、フランス海兵隊の一部隊がセネガルで活動しており、これは主に「アフリカ平和維持能力の強化」(RECAMP)として知られる包括的なプログラムに関

与する軍事教官で構成されている。RECAMP は、フランス、英国、米国の関与を得て 1990 年代後半に開始されたイニシアチブ。

フランスは 2010 年に、セネガルの軍事基地を閉鎖したが、首都ダカールのレオポルド・セダル・サンゴール国際空港の空軍基地は保持。さらに平和維持活動に必要な軍事装備は残したままであった。

両国の当局者は 2 月中旬までに、基地の移転と 2025 年末までに約 350 人のフランス兵の撤退を監督する特別委員会を設立することに合意した。この決定は、フランスとセネガルの外務大臣が共同声明で表明。あわせて「両国は、すべての当事者の戦略的優先事項を考慮に入れた新たな防衛・安全保障パートナーシップに向けて取り組む」と述べている。

コートジボワール

フランスは 2025 年 2 月 20 日、コートジボワールにある唯一の軍事基地を正式に地元当局に引き渡した。これは、フランス代表団の公式ウェブページで発表された。これに先立って 2024 年 12 月 31 日、アラサン・ワタラ大統領が、1 月からポート・ブエの第 43BIMA 海兵大隊からすべてのフランス兵を撤退させると述べていた。

首都アビジャン郊外の海岸沿いに位置するポルト・ブエには、国際空港と自治港があり、約 500 人のフランス兵が駐留していた。この撤退は、同国自身の防衛能力を強化する広範な取り組みの一環。ワタラ大統領は「我が国の誇りである軍の近代化が効果的であり、この文脈で、フランス軍と協調して組織的な撤退を決定した」と述べた。

アフリカのフレグジット

旧フランス植民地だった各国の政府によって始められた、一連のフランス軍追放を現地の人々やマスコミは「アフリカのフレグジット」（脱フランス）と呼んでいる。人々は、何千人ものフランス兵や軍事教官がいるのにテロの脅威が

なくならいことにうんざりしていたため、当局の決定を広く支持している。武装集団は、サヘル地域と西アフリカ地域を、執拗な暴力のホットスポットに変えている。

マリ、ブルキナファソ、ニジェールでは、アルカイダと提携しているジャマート・ヌスラト・ウル・イスラム・ワ・アル・ムスリミン(JNIM)などの組織が、政府の治安部隊に対して全面戦争を仕掛けている。武装勢力は、コートジボワール、ガーナ、ベナンの沿岸地域で攻撃を仕掛けるケースが増えている。地域当局がテロ対策戦略を再評価し、軍事体制を改革し、国防能力を強化し、ロシアのような国からの支援を求めている理由は理解できる。

フランスの反応

チャドとセネガルが軍事協定を破棄する決定をしたことに対して、フランスのマクロン大統領は、2013年以來のテロとの戦いにおけるフランスの支援への感謝の気持ちを忘れていないのではないかと非難した。

「感謝の気持ちをのべるのを忘れたのだと思いますが、それは問題ではありません。そのうちやってくるでしょう」とマクロン大統領はフランス大使を集めた年次演説で述べた。

彼は、サヘル地域のイスラム主義者グループを標的としたフランスの軍事作戦「サーバル作戦」と「バルカン作戦」に言及。「フランス軍がこの地域に展開していなかったら、今日のどの国も主権国家ではなかつただろう」と述べた。

これらの発言は、チャドとセネガルの両方から強い反発をうけた。チャドのアブデラマン・クラマラ外相は、マクロン発言をアフリカ人に対する「無礼」と表現し、アフリカとチャドが二度の世界大戦でフランスを解放する上で果たした「決定的な役割」を思い起こし、フランスはこの役割を本当には決して認めなかつたとのべた。セネガルのウスマン・ソンコ首相もこの意見に賛同し、フランスがサヘル諸国を不安定化させていると非難し、こうのべた。「時に強制的に動員され、虐待され、最後には裏切られたアフリカ人兵士たちが、もし第

二次世界大戦中にフランスを守るために出動していなければ、おそらく今もドイツであっただろう。このことをマクロン大統領に思い起こすべきだ」



ソンコ首相©グローバル・ルックプレス/デンバゲイエ/新華社

フランスは、アフリカでの挫折を政治的な出来事のせいにしてしている。同じ大使演説で、マクロン大統領は、フランス軍がアフリカ諸国から撤退しているのは、クーデターと、フランスが正当と認めていない新政府の台頭のためだと説明した。

「フランスは主権国家の要請で駐留していた。クーデターが起こった瞬間から、そして人々が優先事項はもはやテロとの戦いではないと言ったときから居場所がなくなった。なぜなら我々はクーデター主義者の補助者ではないからだ」。

最近の動向についてフランスのメディアは、アフリカに限られた経済的利益しか持っていないと観察している。2023年、アフリカはフランスの対外貿易のわずか1.9%、戦略的鉱物供給の15%、石油・ガス輸入の11.6%に過ぎない。さらに、サハラ以南では最大の貿易相手国は、ナイジェリアと南アフリカで、両国ともフランスの軍事基地を受け入れたことのない旧イギリス植民地である。

残っているのは

最近までフランスは、マリ、ニジェール、チャド、コートジボワール、セネガル、ブルキナファソ、ジブチ、ガボンの少なくとも8つのアフリカ諸国に軍事基地を持っていた。さらに、1990年以來、フランス海軍は、この地域におけるフランスの経済的利益を保護する「ミッション CORYMBE」の一環として、ギニア湾と西アフリカ沿岸で活動している。



アフリカの仏軍基地 赤は撤退済み、白は今年中に撤退予定、青は残留 (RT)

しかし、過去3年間で、6カ国がパリとの軍事協定を破棄した。2022年8月までにフランス軍はマリから完全に撤退し、2023年2月にはブルキナファソ

がフランス軍を追放すると発表した。同年 12 月までに、ニジェールのすべての軍事基地を地元当局に引き渡した。前述したように、2025 年 1 月から 2 月にかけて、フランス軍はチャドとコートジボワールから完全に撤退し、年末までにセネガルから撤退する予定だ。

フランス軍の残っているアフリカ諸国はいまやジブチとガボンのみだ。ジブチは 2011 年に調印された防衛協力により、アフリカで最大の派遣部隊(約 1,500 人)を受け入れている。バブ・エル・マンデブ海峡沿いに戦略的に位置するこの小さな国には、フランス海軍と空軍の 5 つの基地がある。しかし、フランス軍だけではなく、米国、中国、日本を含む少なくとも 8 つの軍事基地が置かれている。

マクロン大統領は昨年 12 月末、ジブチを訪問。兵士に向けて、ジブチ軍事基地の戦略的重要性を強調。「アフリカにおけるフランスの役割は進化しています。アフリカ世界も進化しています。世論も変化し、政府も変化しています」と述べた。

フランス軍は、1960 年に独立したガボンにも駐留している。同年に締結された防衛協定によって現在、約 350 人だ。両国の間には歴史的・経済的に深いつながりがあるが、地域でのフランスの影響力低下で、ガボン社会でも外国の影響を減らすよう求める声広がっている。

代替案替案を求めて

しかしフランスは、アフリカの軍事基地を失った後もその地位を維持するための代替手段を模索しているようだ。この取り組みの潜在的な同盟国の一つは、モーリタニアかもしれない。2025 年 1 月末、フランス国防省のエマニュエル・チバ軍需部長は、モーリタニアに高度な軍事および電子機器を納入した。この貨物には、戦闘車両、オートバイ、エンジニアリングツール、燃料タンカー、移動式修理工場が含まれている。

公式声明によると、この軍事支援は、サヘル地域での不法移民、国境を越えた犯罪、テロとの戦いにおけるモーリタニア軍の強化を目的にしている。この協力は、モーリタニアとモロッコの関係が深まっていることによるポリサリオ戦線からの最近の脅威を考えると、モーリタニアにも利益をもたらすことは注目に値する。フランスと西サハラを支援するアルジェリアとの間の緊張が高まる中、この支援は非常に合理的に思える。

軍事基地の閉鎖はフランスではなく、アフリカの指導者たちから発表された。したがってこれはアフリカがフランスの政策を拒否している明確な兆候だ。マクロン大統領は今、長い間フランスの地政学的な裏庭と見なされてきた地域で影響力の衰退に対処しなければならない。一方、サヘル地域と西アフリカの国々は、ロシア、トルコ、中国、インド、アラブ首長国連邦などの外部プレーヤーと積極的にパートナーシップを築き始めており、かつてヨーロッパと結びついていた歴史的なつながりから離れている。（了）。

タマラ・リジェンコワ、オリエンタリスト、サンクトペテルブルク州立大学中東史学科の上級講師、「アラブアフリカ」テレグラムチャンネルの専門家。

【翻訳チェック 田中靖宏】